

JICA海外協力隊 日本語教育 ガイド

開発途上国で
日本語を教え、
現地の人々から
学んだこと

10人の
体験談と
現在



独立行政法人
国際協力機構

JICA海外協力隊 日本語教育ガイド

目次

- 03 JICA海外協力隊とは
JICA海外協力隊の職種「日本語教育」とは
- 04 10人の体験談と現在 (2021年1月時点の情報)
 - 04 同じ目標を共有し「協働」できる関係でありたい
馬場 千穂さん (インド) スリ・ラマスワミー・メモリアル大学外国語学部
 - 06 トンガが持つ歴史的背景や価値観を理解しながら活動を行った日々
小栗栖 椎南さん (トンガ) エウア高校
 - 08 日本語学習を通して小さな「できた」をたくさん経験してほしい
原口 望友紀さん (タンザニア) ドドマ大学
 - 10 日本語を学ぶ教室は日本語を学ぶだけの場所ではない
佐々木 祥江さん (ヨルダン) ヨルダン大学外国語学部アジア言語学科
 - 12 「継続」のために、対話を重ね「見える化」「共有化」を構築する
片山 恵さん (ブラジル) ブラジル日本語センター
 - 14 楽しくなければ、学校じゃない! 地球の裏側で日本語を教える
中村 健太郎さん (ブラジル) 第三アリアンサ日本語学校
 - 16 心にゆとりを持ち、失敗しても挑戦し続けられる環境を作りたい
石倉 志朗さん (キリバス) 船員養成校
 - 18 日本語教師の力を高めることにより学習者の日本語力を伸ばしたい
西岡 裕知さん (ペルー) ペルー日系人協会日本語普及部
 - 20 気おくれせずに“使える”日本語をめざそう
浅野 鉄也さん (ベトナム) ホーチミン市オープン大学
 - 22 「楽しい授業を知らない人たち」と楽しく授業し、楽しく学びたい
阿部 由美子さん (ウズベキスタン) ウズベキスタン国立世界言語大学
- 24 応募を考えている方へ: JICA海外協力隊日本語教育Q&A
- 26 活躍するJICA海外協力隊経験者 (2021年1月時点の情報)
- 28 JICA海外協力隊日本語教育派遣実績

JICA海外協力隊とは

JICA海外協力隊は開発途上国からの要請に基づいて派遣され、現地の人々と共に開発途上国の課題解決に取り組みます。任期は原則2年間で、これまでに5万人以上の隊員を派遣しています。以下の3つの目的があります。

- 開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与
- 異文化社会における相互理解の深化と共生
- ボランティア経験の社会還元

JICA海外協力隊(長期派遣)には、「一般案件」と一定以上の経験・技能等が必要な「シニア案件」の2つの応募区分があり、以下のように名称が異なります。「JICA海外協力隊」はこれらの総称です。

■一般案件

20~45歳	青年海外協力隊	開発途上国の人々のために、自分の技術や経験を活かす
46~69歳	海外協力隊	
20~45歳	日系社会青年海外協力隊	中南米の日系社会で、自分の技術や経験を活かす
46~69歳	日系社会海外協力隊	

■シニア案件(一定以上の経験・技能等が必要)

20~69歳	シニア海外協力隊	開発途上国の人々のために、自分の技術や経験を活かす
	日系社会シニア海外協力隊	中南米の日系社会で、自分の技術や経験を活かす

派遣期間は原則として2年です。対象年齢は20歳から69歳までですが、一部の要請は45歳以下の方が対象です。長期派遣の他、派遣期間1か月以上1年未満の短期派遣もあります。

JICA海外協力隊の職種「日本語教育」とは

JICA海外協力隊には180以上の職種があり、「計画・行政」「農林水産」「鉱工業」「人的資源」「保険・医療」「社会福祉」「商業・観光」「公共・公益事業」「エネルギー」の9つの分野に大別されます。「日本語教育」は「人的資源」分野の職種の1つです。

1965年の派遣開始から2023年12月31日までの期間に73か国に3,300人以上の日本語教育隊員が派遣されています。地域別では、中南米(40%)、東南アジア(19%)、東アジア(15%)の順に多く、大洋州、欧州、南アジア、中東、中央アジア、アフリカへの派遣実績があります。

日本語教育隊員は、初等・中等教育機関(中学校・高校)、高等教育機関(大学)、専門学校・職業訓練校、日系日本語学校などに派遣されます。学習者に対する日本語の授業、日本文化紹介や日本語関連のイベントの企画や実施、現地教師の日本語運用能力や指導技術の向上のための協力が活動の中心です。

JICA海外協力隊ウェブサイト

(トップページ) <https://www.jica.go.jp/volunteer/index.html>



同じ目標を共有し 「協働」できる関係でありたい

インド南部タミルナドゥ州の理工系大学で、日本語の授業及び日本理解のための活動や現地の先生方に対する日本語能力や指導力向上の支援を行う。



馬場 千穂

2018年7月～2020年7月

(インド)スリ・ラマスワミー・メモリアル大学外国語学部

草の根レベルで 日本語教育に関わりたい

「『公園に行きます』『公園へ行きます』、何が違いますか。」日本語を勉強していた外国人にこのような質問を投げかけられたことがきっかけで、それまで当たり前のように話していた日本語という言葉に関心をもちました。大学では日本語教育を学びました。今後の進路を考えたとき、元々国際協力に関心があったことから、自然と海外の現場を意識するようになっていました。

在学中に国際交流基金の「日本語パートナーズ」に参加し、インドネシアの高校で活動を行う機会をいただきました。現地の先生方のパートナーとなり活動していく中で、先生方の日本や日本語教育に対する思い・考え方に触れ、現地の先生方の力になりたいと強く感じるようになりました。

JICA海外協力隊に関心を持ったのは、草の根レベルで日本語教育に関わることができるからです。生活や活動の中で現地の方々との協働を通して、お互いの考え方や文化を深く理解しながら、幅広く日本語教育に携わることができる点に魅力を感じました。

理工系大学の日本語教育

2017年に日印首脳会談が行われ、その共同声明には、「今後5年間で、インドの100の高等教育機関において認証日本語講座を設置し、1,000人の日本語教師を育成する取組を行

う」ことが盛り込まれました。このようにインドは近年日本語教育に力を入れている国の一つです。

私の配属先は理工系の私立大学で、学生たちは主に工学や情報科学分野などを専門として学んでいました。日本語教育は、研究活動や将来の就職・進学に結び付くと位置づけられています。学習者の特徴として、卒業後に日本への進学や日系関連企業への就職を目指す学生もいれば、アニメをはじめとする日本文化への関心が強い学生もいます。多くの学生がゼロ初級から学習をはじめ、中には、日本語能力試験N2、N3レベルに合格し、現在日本で頑張っている学生たちもいます。好奇心旺盛でまじめな学生が多いです。



教師間の連携強化で 日本語教育の質的向上を目指す

私が現地で特に力を入れて取り組んだ活動として、教師間の連携強化があります。活動を開始してから、先生方はそれぞ

れが異なる良さや考え方を持っていたらいいにも関わらず、活かされていない、共有されていないのはもったいないと感じていました。また、派遣後、ニーズを把握するために実施したアンケート調査の結果、各教師の共通点として、①日本語能力の向上、②指導力の向上が挙げられました。これら2点の向上は将来的な配属先の日本語教育の質の向上につながります。長期的な視点で考えたときに、個人の努力に加えて、インド人教師同士の連携強化は不可欠であり、教師間の連携強化のための活動を実施することにしました。

「教師間でゴールを設定し、協働を目指す」という目標の下、教師をいくつかのグループに分けたペアでの勉強会から開始し、全員での情報共有、最終的に教師が主体となるように活動内容を発展させていきました。内容は個人や配属先のニーズに合う形で構成し、一人一人と対話しながら進めていけるようにしました。先生方の負担とならないよう授業のない時間に完結できる内容にしたり、その場でフィードバックをして成果を見えるようにしたりするなどして工夫をし、長期的に続けていけるように計画・実施しました。その結果、相乗効果が生まれ、指導力の向上や教師の連携強化にもつながったと思います。



専門知識を深め、 日本語教育に貢献したい

協力隊としての2年間の活動を通して、活動手法や現地の方々との協働など、ここには書き切れないくらい多くのことを学び、経験させていただきました。現地の方々と同じ生活をし、先生方や学生たちと同じ目標に向かって頑張ってきたからこそ、得られた喜びはたくさんあります。もちろん成果ばかりでなく、うまくいかなかった活動もあり、課題にも直面しました。

今は現地で経験や現地で身をもって感じた課題をもとに、大学院で学修を進めています。専門知識を深めながら、教師教育に関する研究に取り組んでいます。私は日本語という言葉が好きで、日本語を教えること、日本語教育を通して人と関わることが大好きです。今後も日本語教育に携わり、願わくは、専門家として、日本語を教える先生方や学習者の皆さんの力になりたいです。

(2021年1月時点の情報)

現地の生活

「Incredible India」という言葉があります。(良くも悪くも?)想像を超えてくるインドという意味です。インドは異なる宗教、言語、文化が混在する多様性のある国です。州や地域によって、違うインドを感じ取ることができます。

皆さんは、「インド」と聞いたとき、どんな風景を想像されるでしょうか。世界遺産? カレー? 牛? 様々なイメージがあるかと思いますが、それがそのまま現地にはあります。インド各地に世界遺産があり、毎食カレーのようなもの(カレーではない)を食べ、人と車とオートリキシャ(三輪タクシー)、そして牛が入り混じり、物を買う人もいれば、物乞いをする人もいて混沌としています。そして、不思議なおいがします。かと思えば、デジタル化が進み、携帯電話が普及し、支払いが電子決済というのもよくあることです。複数言語を話せる人もたくさんいます。

インドでは、毎日が「incredible」の連続です。

隊員の一日常(平日)

6:30	起床。徒歩で出勤、学食で朝食
8:00	授業開始(授業のない時間帯は、授業準備や先生方との勉強会、学生対応など)
17:15	日本語放課後クラス
19:30	学生たちと学食で夕食
20:00	帰宅。近所のお家にお邪魔したり、子どもたちと遊んだり、一人で趣味を楽しむ時間(近所の子供たちとはいつもクリケットをしていました。)
21:30	一日の活動の整理、就寝準備
23:00	就寝

配属先に併設されている住居で生活していました。一日の多くの時間を学校のオフィスや教室で、先生方や学生たちと過ごしていたように思います。配属先で生活していると、学校関係者と常に一緒にいるようになりがちですが、活動とプライベートの時間はなるべく線引きをして、自分一人の時間も大切にできるように工夫していました。





トンガが持つ歴史的背景や価値観を理解しながら活動を行った日々

トンガ王国エウア島にある高校で、日本語の授業や試験問題の作成、同僚日本語教師の教授力向上のための支援を行うほか、隊員による日本語部会やトンガ人日本語教師が参加する日本語教師会の活動にも協力。



小栗栖 椎南

2018年6月～2020年6月

(トンガ)エウア高校

海外経験の豊富な教師を目指し協力隊へ

学生時代、英語教師になることを目指した私は、教員養成課程で学びながら、副専攻で日本語教員養成講座を履修しました。私は理想の教師として、英語の知識だけでなく、多様性を理解し柔軟な考え方を生徒に伝えられる教師を目指しており、そんなときある講義の中でJICA海外協力隊について知りました。

協力隊の活動に興味を持った私は、ホームページの閲覧や説明会への参加の後、草の根の国際協力という協力隊活動のポリシーに引き付けられました。途上国で現地の人々と交わり同じ視点で過ごすことで、私の求めた多様性の理解と同時に、英語教師としての質を高める海外経験を積むことができると思い、協力隊への応募を決意しました。

ゆったりとした温和な国民性

トンガは南太平洋に位置し、日本からはフィジーやニュージーランドなどを経由して渡航できます。太平洋では数少ない、過去どの国にも統治されたことのない国で、人口は10万人ほどです。そのような背景を持つからか、温和な国民性で、時間の流れも穏やかという印象を強くもちました。

宗教の影響は大きく、特にキリスト教を信仰する人が多くいます。毎週日曜日は安息日ということが法律で定められており、空港も休みになるという徹底ぶりです。ほとんどの人が日

曜日には教会に足を運びます。学校教育にも宗教の影響があり、政府系と教会系の学校があります。生活使用言語はトンガ語ですが、首都圏内では多くの人が英語を話せます。

トンガは多くの島から形成されており、JICA海外協力隊が派遣されている島はそのうち4島です。私が派遣されたのは、エウア島という人口5千人ほどの離島にある、エウア高校という6年制の学校でした。トンガの高校は基本的に6年生までですが、より高い教育段階に進む生徒は1年多く学校に在籍する必要があり、1年生から7年生までいます。日本語は選択科目のひとつで、3年生から7年生までが日本語の授業を受けています。

エウア島は他の島に比べて外国人の在住者が非常に少なく、そのほとんどがJICA海外協力隊かアメリカのボランティアです。昔ながらのトンガの生活様式が見られる離島で、生徒の多くは畑や家事を手伝いながら、家族を大切にしていました。



トンガ人は民族衣装を大切にしており、エウア島でも普段の生活や仕事のときに民族衣装を着ます。私もトンガ人にならって、学校では民族衣装を着て授業をしていました。



経験の少ない私が指導した日本語スピーチコンテスト

トンガの外国語教育の中でも日本語教育は特に歴史があり、1986年に最初の隊員がババウ島にあるババウ高校に派遣されたときから現在まで続いています。トンガ人日本語教師も複数名おり、私が担当した生徒の中にも、日本語の教師になると勉強している生徒や教員養成校へ進学した生徒もいました。

在トンガ日本国大使館が毎年主催し、日本語科目のある学校と協力して開催される「書道・日本語スピーチコンテスト」があります。隊員とトンガ人日本語教師を交えた会議で題目を決め、各教師がそれぞれの学校で指導した後、大使やJICA関係者、トンガ教育省の方々の前でスピーチ発表を行うコンテストです。

新卒で協力隊に参加し、日本語を教えた経験の少ない私は、初めてのスピーチ指導で多少の不安もありましたが、過去のスピーチコンテストの動画を参考にしながら、生徒の語彙力にあった内容で、生徒自身のことばで話すという方針で進めました。生徒の自信をつけるため、他の隊員の前で練習もさせました。

本島で行われたコンテスト当日は、慣れない環境からか多くの生徒の顔に緊張の色が見られ、原稿を片手に発表する生徒もいました。そんな中、堂々と発表することができたエウア高校の生徒2名が好成績を収めるという、よい結果につながりました。

今後も英語教師としての資質を高めるための活動を

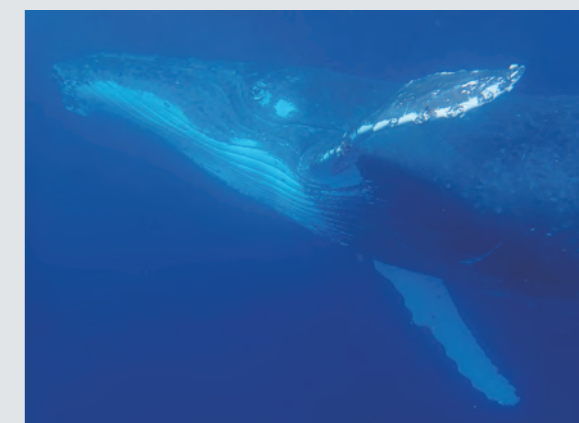
帰国した現在は、さらに教師としての質を高めるための機会を探しています。現在も英語教師を目指していますが、すぐ教師になるのではなく、日本国内での社会人経験、もしくは更なる海外経験を積もうと考えています。協力隊の経験を生かし、更なる経験を積んだ上で、国内の学校教育へ成果を還元していけたらと考えています。

(2021年1月時点の情報)

現地の生活

南太平洋に位置するトンガはオーストラリアなどの地域と同じ気候で、日本と比べて暖かい時期が長く続きます。一年の平均気温は24度ほどで、長袖の服を着る期間は短いと思います。しかし、常に暑いということではなく、私の住んでいたエウア島は、他の島に比べて南に位置するためか、少し冷える時期もありました。またトンガ近郊の海はクジラの子育てに適する海水温らしく、7月から9月にかけて陸からもクジラの背びれが海面に見えることもよくあり、ホエールウォッチングなどでトンガの観光業に大きな恩恵をもたらしています。

首都近辺では飲食店や家電製品、雑貨のお店が充実しています。また、コンビニエンスストアのような中国商店が、多くの人に利用されています。



隊員の一日常(平日)


7:30	起床、身支度、授業準備
8:15	出勤、職員会議、授業準備
9:00	授業、授業観察、教材作成
12:00	学校で昼食
13:00	授業、授業観察、同僚教師と打ち合わせ
15:00	教材作成、英語の勉強
17:00	買い物、ランニング
18:15	夕飯作り、夕飯
20:00	夜間クラスの授業
22:30	就寝

私が派遣されたエウア高校は、日本の無償資金協力で建設された学校で、トイレにTOTOが使われているなど、どこか日本らしさを感じることができる学校でした。学校敷地内の教員住宅に住んでいたため、出勤までの時間は歩いて5分。時間の調整が楽でした。休日は友人の家に遊びに行ったり、ご飯を食べに行ったりすることもよくありました。日曜日の安息日には教会へ行くこともあれば、隊員仲間と食事会をすることもありました。



日本語学習を通して小さな「できた」をたくさん経験してほしい

タンザニア唯一の公的日本語教育機関(大学)で、大学生に日本語コースを提供するほか、スピーチ発表会を開催。日本語・異文化に触れる機会を増やす努力をする。アフリカ日本語教育会議にも参加。

 **原口 望友紀**
2017年10月～2019年10月
(タンザニア)ドドマ大学

文学学科に日本語セクション立ち上げのため初代日本語教育隊員が派遣されて以来、JICA海外協力隊が継続して派遣されてきました。以前は日本語学の学位が取得できる主専攻課程が開講されていましたが、教員不足などの理由から2017年以降は他専攻の学生に向けた選択日本語コースのみ開講されています。国内でドドマ大学のほかに日本語科目を提供している教育機関はなく、同大学は日本語教育・学習の重要な拠点です。JICA海外協力隊のほかに日本語教員はおらず、長年タンザニア人日本語教員の誕生が期待されています。大学は2学期制で私の任期中は1学期あたり3コースを開講しました。学習者は日本語学習経験ゼロもしくは映画やラジオで見聞きしたことがある程度で、ほぼ全員が初学者でした。コースは入門から初級レベルで、1年生から3年生まで約100名が履修していました。



日本人とパーティーをしよう

タンザニアでは日系企業への就職や留学の機会は大変少なく、日本人との交流も日本旅行も稀です。日本語を勉強してもメリットがないと考える学生もいます。日本語を選択した学生が日本語により魅力を感じ、日本に親しみを持てるような工夫が必要でした。また、将来日本語を使う環境は得られなくても、授業や課外活動を通して「できた」「うれしい」という達成感や満足感を味わってほしいと考えていました。

一つの試みとして学習2年目のコースで「日本人とパーティーができる(ようになる)」という目標を設定し、コースの最後に日本人ゲスト5名を招いたパーティーを行いました。授業では、パーティーに向けて必要な日本語表現を学んだり、日本語を使ったゲームの準備や日本語の歌の練習をしたりしました。パーティー当日、学生のいきいきとした表情を見ることができ、挑戦してよかったと思いました。

国内の外国人にももっと目を向けていきたい

活動では思うように進まなかったことや未達成に終わったものもありますが、タンザニアの日本語教育の発展のために活動できたと思っています。その過程ではタンザニア人含め多くの方にサポートしていただきました。これまで国際協力やアフリカに関心はあるもののどこか自分事に感じられていませんでしたが、活動を通して現地の学生や同僚、友人、アフリカの日本語学習者など、顔を思い浮かべることができる存在ができたことは私にとって大きな変化です。またいつかアフリカを訪れたいです。

帰国後の現在は、生活者や就労者を対象とした日本語教育機関で日本語教師として働いています。協力隊を経験し、日本で暮らす外国人や、日本社会と外国人材の関係により関心を持つようになりました。日本語教師の経験や外国人として海外で生活した経験を次は日本社会で活かしていきたいです。(2021年1月時点の情報)

日本語スピーチに挑戦しよう

隣国ケニアでは日本語弁論大会が開催されており、ドドマ大学は1名の出場枠をいただいていた。代表者1名を決めるにあたり選考方法を考えた結果、学習3年目の学生の集大成として日本語スピーチ発表会を行うことにしました。学生は日本語でスピーチ原稿を書くことが初めてで、言いにくいことを日本語でどう表現すればいいのかと文章作成に大苦戦。学生が書いたスピーチを一緒に読みながら、「ここでは何を伝えたい?」「こういふときの文法を使えばいいかな?」と完成まで修正を重ねました。審査員にはJICA関係者やドドマ在住の日本人を迎え、学生は「タンザニアの部族」「日本語を勉強する理由」などタンザニアの魅力や日本との繋がりを日本語で発表しました。緊張しながらも堂々と話す学生の姿に3年間の努力の積み重ねを感じました。代表者はケニア大会で3位(第11回大会)、奨励賞(第12回大会)を受賞しました。

忘れられなかった国際協力・アフリカへの思い

大学卒業後、企業の営業職として働いていたとき、学生の頃に抱いていた国際協力やアフリカへの思いをふと思い出すことがありました。何か自分に関われることはないかと調べているとき、JICA海外協力隊のホームページで「日本語教育」「日本語教師」という言葉に初めて出会い、興味を持ち、働きながら日本語教師養成講座に通うことにしました。

講座を修了し悩んだ末会社を退職し、日本語教師として働き始めました。ベトナム、フィリピン、日本で介護や看護人材のための日本語教育事業に日本語教師として2年ほど携わった後、アフリカを希望してJICA海外協力隊に応募しました。

国内唯一の日本語教育機関、唯一の日本語教員

配属先のドドマ大学は、最大都市ダルエスサラームからバスで西へ9時間ほどのドドマ市にあります。2009年に外国語

現地の生活

タンザニアでは国民のほとんどがスワヒリ語を話します。また120以上の民族から成り、出身民族の言葉も持っています。公用語は英語ですが、学歴や環境により理解度や使用度は人によって異なります。私の場合、大学配属ということもあり、派遣前訓練では英語の訓練を受けました。

大学では確実にコミュニケーションをとるために英語を使用していましたが、街での買い物や近所付き合い、旅行、同僚や学生との雑談やSNSではスワヒリ語を使うようにしていました。拙いスワヒリ語でしたが、スワヒリ語を話すことで同僚や周囲のタンザニア人との心の距離がぐっと縮まり活動がしやすくなりました。現地のことをよく知るには、やはり現地語でのコミュニケーションが必要だと感じました。



隊員の一日常(平日)

6:00	起床、準備、職員バスで通勤
7:30	事務所や学食で朝食
8:00	授業
12:30	学生や同僚と学食で昼食
14:00	授業
16:00	職員バスで帰宅
17:00	市場への買い出し、近所を散歩
18:30	夕飯
20:00	授業の準備
23:00	就寝


自宅から学校まで距離があり、通勤では職員バスを逃すと公共バスや3輪タクシーを捕まえるのに苦労しました。3輪タクシーは隊員馴染みの運転手を利用するようにしていました。学食は安くておいしいし、学生や同僚とも交流できるので、ほぼ毎日行っていました。日本語教員一人だったため、準備や採点などの作業は自宅に持ち帰って行うこともありました。



日本語を学ぶ教室は 日本語を学ぶだけの場所ではない

首都アンマンにあるヨルダン大学で日本語コースの運営と授業を行うほか、一般向けのJAAJ日本語講座でも授業を担当。定期的に日本文化を紹介するイベントも実施。



 佐々木 祥江
2018年1月～2020年1月
(ヨルダン)ヨルダン大学
外国語学部アジア言語学科

日本で教えた後、 海外でも教えた

日本語教師を始めた頃から、日本で教えた後は、海外でも教えたと思っていました。働いていた日本語学校でJICA海外協力隊に参加する先生がいて、その時初めてJICA海外協力隊に日本語教育という職種があることを知りました。また私自身、異なる文化や習慣を知ることが好きなので、海外での生活に適応できると思えました。

なぜヨルダンで 日本語を学ぶのか

日本語学習者の多くは、アラビア語に吹き替えられた日本のアニメを子どもの頃に見ています。もちろんアニメだけではありませんが、日本との繋がりが生まれ、日本語ってどんな言葉だろうという好奇心を持っています。しかし、ヨルダンでは

学んだ日本語を仕事や留学に活かせるチャンスはほとんどありません。学習者の多くは趣味・教養のために日本語を学



びます。私はヨルダンへ行く前、ヨルダンの日本語学習者はなぜ実用的ではない日本語を学ぶのだろうという疑問を持っていました。

ここで日本語弁論大会出場者2名のスピーチの一部を引用します。1人はヨルダン大学の学生です。「日本語を学んで、自分自身がどんどん上になって行ける気がします。日本語を学んで、何よりも欲しかったもの、居場所と呼べるところを見つけました。」もう1人はJAAJ日本語講座の学習者です。「JAAJで出会った友達もたくさんいます。掛け替えのない友達をつくりました。良い先生たちと出会いました。そして

JAAJのみなさんが私をもっと良い人になりました。」
将来活かせるかどうかわからない日本語ですが、このようにヨルダンの学習者それぞれが見つけたものがあります。彼らのために何を教えられるのかを考え続けた2年間でした。

日本語弁論大会の開催

ヨルダン大学外国語学部アジア言語学科の学生は、外国語学部の選択科目、全学部対象の自由選択科目として日本語を学んでいます。

JAAJ日本語講座では、幅広い年齢の一般の人が日本語を学んでいます。JAAJでは定期的に教師会が開催され、現地の日本語教師が参加して、会議や発表を行っています。日本文化紹介イベントや会話クラブなども積極的にを行っています。

ヨルダンの日本語教育において一番大きなイベントは、一年に一度開催している「日本語弁論大会」で、約半年かけて準

備をします。ヨルダンの日本語学習者にとっては自分の日本語力を試すことができる一つの機会です。

弁論大会出場者の日本語指導はもちろんですが、大会の運営が大きな仕事になり、書類作成や大学関係者への連絡等、準備期間中はいつも何かに追われていました。大学のアジア言語学科長と秘書とは普段から良い関係を築いておくことで、大会の準備にとても協力してもらえるようになりました。日頃から英語またはアラビア語でコミュニケーションをとることが重要です。

大会当日は、出場者たちが見せた練習の成果と受賞者の嬉しそうな顔を見て、胸がいっぱいになりました。また大会には他学部の学生も多く観に来て、日本語コースを知ってもらう良い機会になりました。

ヨルダンで教えた経験を 今後活かしたい

派遣前、ヨルダンという異文化の中で、生活や学習者たちとの関係がうまくいか不安だったことを思い出します。2年の月日が過ぎようとしていた頃、そのような不安は全て消えていました。2年間を振り返って思うことは、私は良い環境と良い人々に恵まれたということです。学習者のみんなの「せんせいー！」という声と笑顔を時々思い出します。



ヨルダンでの活動を終え、現在は日本語学校で留学生に教えながら、大学院で勉強をしています。日本語と日本語教育について学び、専門性を高めたいと思っています。大学院で授業を受け、クラスメイトと話す中で、ヨルダンでの活動中に解決できなかった問題のヒントになる物事の見方や考え方を知る時があります。そんな時は、「もっと早く知っていたらよかったのに！」と悔しくなります。

今後は日本とヨルダンどちらの経験も活かし、日本語教育に貢献できるように努力していきたいと思っています。
(2021年1月時点の情報)

現地の生活

ヨルダン料理(またはアラブ料理)はおいしいものがたくさんあります。現地の人が家に呼んでくれると、いつもおいしい料理をご馳走してくれます。

大きな肉の塊から削り落とした肉をパンで包んだシャワルマサンドイッチ、味付けをしたご飯の上に鶏肉を乗せた料理などは大学内にお店があり、よく食べました。

ヨルダンの人口の90%以上はイスラム教徒で、毎年断食の期間「ラマダン」があります。私は以前、ラマダンは我慢する辛い時間だと思っていました。ラマダンの開始が近くなった日、授業中に「もうすぐラマダンだね」と言うと、学生たちの顔が嬉しそうになり急にクラスの雰囲気明るくなったことがあります。その後、ラマダン中は家族や親戚が集まり夜の食事を楽しむ特別な期間だと聞きました。学生たちがわあーと嬉しそうな表情になったあの瞬間は忘れられません。



隊員の一週間

日	ヨルダン大学で授業(初級1・2) JAAJ日本語講座で授業
月	ヨルダン大学で授業(初級3)
火	ヨルダン大学で授業(初級1・2) JAAJ日本語講座で授業
水	ヨルダン大学で授業(初級3)
木	ヨルダン大学で授業(初級1・2)
金	休み
土	JAAJ日本語講座で 会話クラブやイベントの実施

JAAJ日本語講座での授業は学期ごとに曜日と時間を調整するので、表の曜日とは限りません。土曜日は毎週ではありませんが、JAAJで会話クラブや日本文化イベントが入ります。大学でのイベントは学期中2回ほどで、学生と日時を決め、授業後の午後に行っていました。ヨルダンでは金・土曜日が週末です。金曜日は礼拝の日で、午前中はほとんどのお店が閉まり、街中が静かになります。



「継続」のために、対話を重ね 「見える化」「共有化」を構築する

世界最大の日系人移住地であるブラジルの日本語教育の中心的機関で、日本語教師養成講座や教師研修の見直しと企画運営を行う。教師研修や講座に関わる講師の育成、継続可能な運営体制を構築。



片山 恵
2018年7月～2020年7月
(ブラジル)ブラジル日本語センター

これまでの経験を 再び海外で活かしたい

これまでオーストラリア、フィリピン、アメリカで日本語教育に携わってきました。その中で生まれた問いを整理するために大学院へ進学しました。そして、教師に焦点を当てた日本語教育におけるアドボカシーについて研究しました。修了後は、日本の大学で留学生に日本語を教えていましたが、再び海外で、日本語を奮闘しながら教える教師の支援に関わりたいという想いから、自由度の高い活動ができるJICA海外協力隊に参加することにしました。

ハイブリットな日本語教育

中南米における日本語教育は、日本移民による子弟教育として始まり、時代とともに母国語を忘れないための継承語として変容してきました。近年は日系人といえども、家庭内での日本語使用も激減し、非日系の学習者も増え、外国語としての日本語教育として発展しています。また、出稼ぎで日本とブラジルを移動するようになってからは、多様な背景を持つ日本語学習者が増加し、日本語力を世代で判断することは難しくなっています。そして、南米で最も日本語学習者の多いブラジルでは、「公教育機関」よりも「公教育以外の機関」で日本語を学ぶ学習者が多いのが特徴です。さらに、歴史的背景から、他の国に比べ「子ども」の日本語学習者が多いことや、異なるレベルや年齢の学習者が混在する「複式授業」も多くの日本語学校で



写真提供：マイリボラン同志会日本語学校

行われています。

配属先のブラジル日本語センターは1985年に設立されました。教師のための講座や研修、生徒のためのコンクールやイベントを実施し、日本語の指導及び教育的育成と向上を図っています。また、日本語・日本文化の普及を目的として、調査、研究、教材開発及びその出版活動も行なっています。

対話を重ねて、 コースを共に創り上げる

JICA海外協力隊の活動期間は基本的に2年です。そのため、活動当初から現地の人たちだけでも継続できる仕組みを作ることを常に意識しながら活動を行ってきました。継続のためには、内部の人たちが本当に必要だと思うことや、大切にしていきたいと思っていることを形にしていくことが重要だと考えます。そのため、時間の許す限りお互いが納得するまで対

話を重ねました。その上で、関わっていく人たちが考え抜いた研修や講座のカリキュラムやシラバスを一緒に作成しました。また、講師間でコース全体を共有できるように、クラウドを活用し運用しました。このように関わる全員で考え共有するシステムを構築することでコースに関わる講師が同じ方向に向かって進むことができ、コースとしての統一性を保てると考えます。そして、その一つ一つを可視化し、記録を残し、データベース化していくことが継続、つまり将来につながるのだと考えます。

講座や研修の中でコースの内容を一新したものと、教師を養成する「日本語教師養成講座」、メキシコ・ドミニカ共和国・ベネズエラ・コロンビア・ペルー・ボリビア・パラグアイ・チリ・ブラジル・アルゼンチン・ウルグアイその他中南米各国の新人教師を対象とした「汎米日本語教師合同研修会」があります。どちらのコースも受講生を主体とし、受講生同士の協働によって自ら深く考えることを体験しながら学びを得ることができるようにデザインしました。それぞれの詳細は実践報告としてありますので、詳しくはそちらをご覧ください幸いです。

◎片山恵(2020)「ブラジルの日本語教師養成講座」『早稲田日本語教育学』29, pp.143-148.

◎片山恵(2020)「考える」教師を育むー汎米日本語教師合同研修会の試み」『言語教育実践イマ×ココ』8, ココ出版



公立高校で 魅力化コーディネーターとして活動

帰国後は地元の公立高校でコーディネーターとして働いています。勤務先校は内閣府で新しく創設された国内留学制度に採択され、来年から国内留学生の第1期生の受け入れが始まります。そのためのオンラインイベントによる全国各地に向けた生徒募集や広報、受け入れ体制の調整を行っています。また、より高校が魅力的になるために、学校と地域をつなぐことも求められています。学校のウチとソトの両方の視点を活かし、社会につながる学校づくりを目指しています。

(2021年1月時点の情報)

現地の生活

2020年現在、ブラジルには190万人の日系人がいると言われています。そして、任地であるサンパウロ市には47都道府県の県人会があります。週末になると、必ずといっていいほどここの県人会が日本のイベントを行っています。各県人会がその地域の特色を生かした食べ物を販売したり、祭りを開催(例えば、ラーメン祭り、カラオケ大会、桜祭り、盆踊り、餅つき大会等)しているため、いつでも日本を感じることが出来ます。

また、日本人街(リベルダーデ)も存在し、日系スーパーで日本食材を簡単に手に入れることができます。週末にはたくさんの露店が並び、焼きそばやたこ焼きなども販売され、多くの人で賑わっています。



隊員の一週間


日	移動日
月	休み
火	講座・研修会議、コーディネーター会議
水	講座や研修の準備
木	講師勉強会
金	地方研修のための出張、現地日本語学校見学
土	地方研修に講師として参加

基本的には土日休みで、研修や講座に向けて、事務所でデスクワークです。毎週火曜日は、午前中に各研修の会議をし、午後からは事務所の教務スタッフとの会議をしていました。そして、木曜日には研修を担当する講師たちと勉強会を行っていました。学校が長期休みになる1月と7月は研修ラッシュで、毎週末地方に出向き、研修の講師としてワークショップや講義を行います。前日に地方入りし、現地の授業の様子などを見学させていただいた上で、最終的に研修内容の微調整を行うようにしていました。

楽しくなけりゃ、学校じゃない！ 地球の裏側で日本語を教える

サンパウロ州中心部から北西に600km、
90年以上前に日本人移住地に設立された日本語学校で
日本語や日本文化の継承のための教育や情操教育を行う。
村内行事の企画運営や近隣の学校との合同行事にも協力。



 中村 健太郎
2018年7月～2020年3月
(ブラジル)第三アリアンサ日本語学校

国が変わっても、 教育の力は変わらない

私がこの活動に参加したいと思った動機は、2つあります。1つ目は、学生時代にJICA海外協力隊の経験者とお会いしたことです。1度目は高校生の時にJICA地球ひろばで経験者のお話を聞き、2度目は大学生時代に友人の先輩でアフリカに短期派遣された方がおり、海外で働くことや生活することに興味をもちました。2つ目は、中学校の教員となってから出会った日本人学校出身の生徒との出会いです。教員4年目に担任したクラスに、ジャカルタ日本人学校からの編入生がおり、現地での教育や生活について話を聞き、興味をもちました。また、その生徒が卒業時に私に言った「ジャカルタも楽しかったけど、1年しかいなかったこのクラスも本当に楽しかった。」という言葉が心に残りました。

場所が違っていても学校教育を通じて子どもたちの成長に関われることに魅力を感じ、海外にいる子どもたちとも、日本と

変わらない豊かな経験をともに得たいと強く思いました。JICAと富山県の連携協定(自治体連携)(注)により現職教員の派遣が行われていることを知り、このチャンス逃したくないと思い、応募しました。

注：富山県は1978年から第三アリアンサ日本語学校に教師を派遣しており、2017年からはJICAと富山県の連携協定(自治体連携)により現職教員を派遣。

2万km離れた、 もうひとつの富山

ブラジルには、現在約160万人の日系人が居住しており、世界最大の日系社会が存在しています。100年以上前に日本からの移民を受け入れるようになり、現在でも日系人同士でコミュニティが作られ、日系社会が築かれています。

任地である第三アリアンサは、通称富山村とも呼ばれ、当時富山県の人々を中心に移住団が組織され、原生林が生い茂る土地を耕し、村を作り上げた移住地です。高齢の方たちは、現在でも日常会話で日本語を使い、煮物やみそ汁などの食文化も残っています。歴史の中では、日本語を学んではいけない時期もありましたが、日本人としてのアイデンティティや文化を継承し続けるために日本語学校が開校され、現在まで続いています。

日本語学校に通う生徒は、日系人の子どもたちを中心に10人程度です。開校時は60人近くの生徒がいたようですが、過疎化が進み、生徒数が減少しています。子どもたちは日系3世や4世で、日常会話ではポルトガル語を話しています。また、アニメや漫画などで日本文化に興味をもち、日本語を学ぶブラジル人の生徒もいました。



日本語学校は楽しい！ 日本語学校へ行きたい！

低年齢の生徒が多かったことや生徒数が減少していることもあり、とにかく子どもたちが日本語学校は楽しい場所で、日本語学校へ行きたいと思えるように活動に取り組みました。できる限り遊びながら学ぶことに重点を置き、日々の授業では日本語カルタや神経衰弱、ひらがなババ抜き等のゲーム性のある教材を用いながら日本語や日本文化に触れることを意識しました。また、双六をしながら数字の勉強をしたり、福笑いで顔の部位の名前を覚えたりと、日本の伝統的な遊びと勉強を組み合わせた授業にも取り組みました。

日本語や日本文化への興味関心を高めることが、日本語を学び続けることにつながり、年齢が上がったときに、日本語能力試験を目指したり、日本へ行ってみたいという意欲につながったりするのではないかと考えています。



グローバルな人材の育成と 「本物」を見る意識を伝えたい

生徒たちが何かを学ぼうとする意欲はどの国でも変わりません。小さい時から、異なる言語や文化に触れることは素晴らしいことだと思えました。生徒たちが日本語学校に通う目的や目標はそれぞれ違いますが、日本語を通して新たな仲間と出会い、日本語学校でしかできない体験をし、子どもたちとともにとても貴重な経験を積ませてもらいました。

現在は、公立の中学校で学級担任と社会科を担当しています。自分の話をする機会はそれほど多くはありませんが、授業を通してボランティアとして活動することや海外での生活経験などを生徒たちに伝えています。世の中がグローバル化していく中で、国と国との繋がりは深くなっています。生徒たちには、少しでも海外のことに目を向け、日本と世界との関係にも興味をもってほしいです。また、教科書で学ぶことやメディアを通して知ることだけではなく、自分の目で「本物」を見るという意識をもってほしいと思っています。見聞したことだけでは感じることでできない「本物」を見たときの感動や新たに知ることなど、自分の肌で感じることの大切さを伝えたいです。生徒たちが少しでも興味や関心をもち視野を広げ、自分の人生を自分で豊かにしていくきっかけ作りになればと思いながら、今日も目の前の生徒たちに向き合っています。

(2021年1月時点の情報)

現地の生活

ブラジルは南半球に属しているため、日本とは季節が逆になります。雨季と乾季があり、夏の時期は40℃を越え乾燥した日が続く大変ですが、比較的過ごしやすい気候の日が多いです。ただ、大雨になると停電やインターネットの電波が切れることが多くあります。

私の任地は、都心部からは600kmも離れた地域にあり、道もあまり舗装されていないなど未発達な地域でした。住居は日本語学校内に併設された宿舎に寄宿していたため、出勤時間はゼロです。しかし、近くで買い物をする店がなく、最寄りのスーパーマーケットまでは40kmもあり、1人では買い物に行くことも困難でした。ただ、日本語学校の保護者の方や村の方たちがいつも私のことを気にかけてくれ、助けてもらいながら生活しました。



隊員の一日常(平日)


6:00	起床・朝食
8:00	学校清掃、授業準備 地域のゲートボールに参加
11:00	昼食
12:00	授業準備
13:30	授業
17:00	片付け
18:00	夕食
19:00	授業準備、自由時間 地域のフットサルに参加
22:30	就寝

授業では、日本語だけではなく日本文化や図工や音楽等も教えていました。授業準備には時間がかかりますが、子どもたちの楽しそうな笑顔には癒されます。かなり奥地に住んでいたため、娯楽になるものはありませんでしたが、地域のスポーツ活動に参加してリフレッシュしていました。また、睡眠時間をしっかりとることを意識して、体調管理に努めました。



心にゆとりを持ち、失敗しても挑戦し続けられる環境を作りたい

キリバスの船員養成校で、キリバス人教師とともに訓練生に日本語の授業を実施するほか、日本の学校との交流やキリバス人教師のスキルアップなどに協力。訓練生には「生きた日本(語)」を伝えるよう心がける。

 **石倉 志朗**
2018年7月～2020年3月
(キリバス)船員養成校

社会人として、現地の人々のために働きたい

私は、大学時代に韓国へ留学しました。現地でさまざまな方々と交流しながら過ごすことにより、自分が日本人であることを再認識し、かえって日本語や日本文化に関心を持つようになりました。帰国してからは、それまで当たり前と思っていたことが新鮮に、またすばらしく思えるようになり、日常をより新鮮な気持ちで過ごせるようになりました。学生時代は自身の語学力向上のために留学したので、社会人になったら海外で現地の人々のために働いてみたいと思っていました。

私は国語教員として高校で働いています。普段は日本語を日本の生徒に教えていますが、海外の方々にも教える経験がしたいと思っていました。その経験は、帰国後の教員生活にも活かされるだろうと思いました。また、国語教師として働く日本人の私だからこそ教えられることがあるかもしれないとも思い、現職教員特別参加制度(注)を利用して、協力隊活動に参加しようと思いました。

注：公立学校、国立大学附属学校、公立大学附属学校、私立学校および学校設置会社が設置する学校の教員が身分を保持したままJICA海外協力隊に参加するための制度。(現職教員特別参加制度)
https://www.jica.go.jp/volunteer/application/seinen/support_system/teacher/index.html

日本の漁船で働く乗組員の育成

キリバスは、赤道直下の常夏の島国です。人々は総じて陽

気で、歌ったり踊ったりすることが好きです。あちこちで聞こえるレゲエ調の陽気な音楽は、人々の内面をそのまま表現しているように聞こえていました。一方で、島国気質のせい、シャイな方々も多くいるようでした。

配属先は船員養成校(Marine Training Centre:MTC)の漁業コースでした。このコースの修了生は、日本の遠洋漁業のカツオ・マグロ漁船に乗って日本人と一緒に働きます。訓練生はここで6か月間、釣りの技術のほか、日本の言葉や文化、生活習慣などを学びます。

訓練生は18歳から30歳の男性です。MTCは全寮制なので、彼らはここで寝食を共にしながら学びます。私自身MTCの敷地内に居住していたため、就寝前の1時間の自習時間に教室へ行き、彼らの勉強を手伝ったりしました。特に、日本の歌や踊りを教えると、意欲的にかつ楽しそうに取り組む姿が印象的でした。また、私の家のまわりの雑草が伸びたときなどには草刈りに来てくれたり、何かあれば進んで手伝ってくれたりしたのは、非常にありがたかったです。



日本の学校とオンライン交流

訓練生が日頃勉強している日本語を披露する目的で、私の日本での勤務校とオンラインで交流しました。訓練生は20歳前後の若者が多く、同じような年代の日本人と交流することは、彼らの日本語を学習するモチベーションを上げるためにも有効だと思いました。私自身、かつて担任していた教え子と、オンラインであれ再会できることは大きな楽しみでした。

当日実施したことは、①キリバスの紹介、②日本語での自己紹介・会話のロールプレイ・スピーチ、③日本の歌の披露、④キリバスの歌とダンスの披露です。日本の勤務校にも同じようなことをしてもらいました。合間の休憩時間には、日本の高校生と何とか話そうと、今までに学習した日本語で懸命に話しかけたり質問したりする訓練生の姿も見られました。

準備から当日まで、遠く離れた日本で暮らす同年代の日本人に披露するため、訓練生はいつにもまして真剣に、いきいきと取り組んでいました。日本の高校生も、訓練生たちの日本語力や元気に圧倒されたり感動したりしたそうです。双方にとって(私にとっても)有意義な取り組みでした。



日本の生徒が国外に目を向けるきっかけ作り

キリバスでのボランティア活動を通して、身の回りの人や物などを、今まで以上に大切にしようと思えるようになりました。キリバスの人々は、家族を大切にします。物や娯楽は不足していますが、人々の表情は総じて明るく、大人も子どもも笑顔がよく似合います。そうした姿を見ていると、これまで「ない」ものにばかり目を向けていた自分を反省し、もっと「ある」ものに目を向けようと思いました。それが私の、また私の周りの人々の幸せにつながっていく気がしました。

今後は、勤務校などで、折に触れてボランティア経験を伝えたいです。現地での生活や活動の様子を伝えることで、生徒が国外に目を向けたり、あるいは日本や自分たちを取り巻く環境を見つめ直したりするきっかけ作りをしたいと思います。また、現地での活動中、心にゆとりを持ち、失敗を明るく笑い飛ばせるキリバスの方々には、私は支えられました。これからは、私自身がそうあり続けることで、日本の生徒が安心して過ごし、挑戦し続けられる環境作りをしていこうと思います。

(2021年1月時点の情報)

現地の生活

キリバスでは、食の大切さや、日本での食の豊かさを実感しました。

現地では野菜が入手困難で、あったとしてもきゅうりが1本500円、キャベツがひと玉2,000円と高価です。肉は基本的に全て冷凍輸入品です。魚は獲れるものの、海水が暖かいせいか身が締まっていない印象でした。麺類は、中国などからの輸入品はありますが、日本の物はありません。

個人的に、食べる物はあるものの食べたい物は少なく、食が細くなった結果、着任して5か月で体重が10キロ減りました。気分がすぐれなかったり、精神的に落ち込んだりすることも増えました。改めて、食事の大切さ、いかに日本で食に恵まれていたかを実感しました。その分、たまに日本から食べ物が送られてきたときは、涙が出るほど嬉しかったです。



隊員の一週間

日	休み(読書、日記、筋トレなど)
月	授業(単語)
火	授業(文法・会話)
水	授業(練習)
木	授業(まとめ①:問題演習)
金	授業(まとめ②:会話ロールプレイ)
土	休み(買い物など)

基本的に毎日、MTC漁業コースの訓練生に日本語を教えていました。教科書『みんなの日本語』を、1週間で1課を終えるペースで進めました。学習の合間に、日本の歌を教えたり、日本文化を動画で紹介したり、日本人のゲストを招いて授業してもらったりもしました。



日本語教師の力を高めることにより 学習者の日本語力を伸ばしたい

日系人協会で現地の日本語教師対象の講座を実施するほか、近隣の日系校を訪問して日本語の指導法を助言。南米の日本語教師の連絡協議会やJICA在外研修の講座の運営も担当し、教師の研修機会を設ける。



西岡 裕知

2018年1月～2020年3月

(ペルー)ペルー日系人協会日本語普及部

自分ができると 世界に関わりたい

もう一度南米で生活してみたい、そこで他の人の役に立つ活動をしたいというのが参加の動機でした。「もう一度」というのは、教員をしていたときにベネズエラ国カラカス日本人学校で3年間勤務した経験があり、そのとき接した人々や自然の印象が私の南米LOVEの種火として燃え続けていたからです。

協力隊として自分ができることは何かを考えた結果、教員経験を生かした「教育行政・学校運営」という職種もありましたが、以前から興味があった「日本語教育」を目指すことに決め、退職後、日本語教師養成講座に通い、日本語学校で経験を積みました。

ペルーの日本語教育の 中心的組織で活動

配属先はリマにあるペルー日系人協会 (Asociación Peruano Japonesa: APJ) 日本語普及部です。APJはペルーの日系社会の中心的な組織で、病院、劇場、高齢者デイケアセンター、文化講座、日本語教室など多岐にわたって運営しており、日系人だけでなく非日系人にも開かれています。日本語普及部はペルーの日本語教育の裾野を広げ、日本語教育全体のレベルを底上げすることを目指しています。

ペルーは2019年に日本人移住120周年を迎えました。その歴史は平坦なものではなく、第二次世界大戦中には日系人が強制的に国外退去させられ、多くの人がペルーに戻れな

かったそうです。これにより日本語の継承が途絶え、それが現在の学習者の日本語力に影響していると思われる。

リマには5つの日系校といくつかのプライベートの日本語教室があります。日系校には非日系人も多く在籍しています。親が日本で働いていたことにより日本で生活していた一部の生徒を除き、日系の生徒でも日本語のレベルはあまり高くありません。

教師の力を高めるために 講座・学校訪問・研修を実施

ペルーの日本語教師はほとんど日系人で、日本での学校教育や就労の経験を通して日本語を習得しています。専門的な研修を受けた人は少なく、経験を通して指導法を学ぶことができました。そこで先生方の指導力をさらに高めることが、生徒の日本語力を伸ばすことにつながると考え、「生徒の意欲を伸ばす」「語彙を増やす」「漢字を楽しく学ぶ」「助詞の使い方」「初級で可能な短文作り」など、教師対象の講座を企画しました。

講座のほか、週の2日間を日系校訪問にあてました。先生の授業を見て意見交換をしながら、改善点や効果的な指導法を伝えました。また、私の授業を見てもらって指導の実際やその背景にある考え方を伝えるようにしました。

新しく日本語教師を志す人たちのための養成講座も行いました。受講者8人は半年間の講座を修了し、うち4人は日系校やプライベートで日本語教師としてペルーの日本語教育を支える力になっています。

その他、南米9か国の日本語教師の代表が参加する連絡協議会において、講座を企画したり、南米4か国の日本語教育隊

員や隊員配属先が集まるJICA主催の在外研修を企画したりしました。パラグアイに派遣された同期の隊員に協力し、パラグアイのピラポで日本語教師対象の講座を実施したこともあります。国を越えた連携で一つのプロジェクトを実現できるダイナミックさがJICA海外協力隊の魅力であると実感しました。



外国にルーツのある生徒の 学習支援に関わりたい

日系校でダブルリミテッド(2つの言語をある程度使えるが、両方とも不十分な状態)の生徒に接したことがありました。日本の小学校を卒業してペルーに戻ってきたその生徒は、学齢相応の日本語は理解していましたが、抽象的な概念の理解はまだ不十分でした。一方、スペイン語は家庭で使うだけでは語彙が限られているので、基本的な言葉でも知らないものがありました。両言語とも生活言語はともかく、学習言語を獲得するには至っていませんでした。

日本にも外国にルーツのあるダブルリミテッドの生徒がいます。帰国後、そのような生徒の学習支援に関わりたいと考え、近隣の市のNPOに所属しました。ここでは諸事情で中学校を卒業できなかったり高校に入学できなかったりした生徒が学んでいます。彼らは将来、日本で生活し働きたいと願っています。その実現のための一歩として、中学校卒業程度認定試験(中卒認定)や高校入試を目標に学習しています。私は日本語と社会科を担当していますが、先日、生徒たちから中卒認定の社会科の試験に合格したという知らせが届きました。将来につながる一つの土台ができたことがうれしく、今後も関わっていきたいと思っています。



(2021年1月時点の情報)

現地の生活

ペルーはマチュピチュやナスカの地上絵などの遺跡が有名ですが、自然もとても豊かな国です。地形は沿岸の砂漠地帯、アンデスの高山地帯、アマゾン熱帯雨林地帯の3つに分かれていて、それぞれ異なった風景が見られます。

私はアンデス高山地帯が特に印象的でした。赤・黄・緑など七色の縞模様の土が層になっているレインボーマウンテン。なんと標高は5,000m! ラグーナ69は4,600mのところにある青く澄んだ湖。湖岸には白く輝く氷河に覆われた山がそびえています。このような湖がいろいろな所に点在しています。

富士山よりはるかに高い所を自分の足で歩いて絶景を味わう贅沢な体験ができます。ちなみに自信がない方は馬に乗ることもできるので安心ですよ。




私の年表

大学	教育学部の中学校教員養成課程(社会科)で学ぶ
大学卒業後	小学校・中学校の教師として勤務
40歳	ベネズエラ国カラカス日本人学校で3年間勤務
58歳	退職し、日本語教師養成講座に通う
59歳	民間の日本語学校の非常勤講師として就職
63歳	JICA海外協力隊に参加
現在	地域のNPOで日本語や教科指導を担当

小中学校教師として30年以上勤務しました。その間に文部省(当時)の在外教育施設派遣教員として勤務したことをきっかけに、退職後はなんらかのかたちで外国に関わりたと思うようになりました。以前から興味があった日本語教師の道を選び、実務経験を積んだうえでJICA海外協力隊に参加しました。現在は、近隣の市の外国にルーツのある生徒の日本語や教科の指導に関わっています。

気おくれせずに “使える”日本語をめざそう

ベトナム北部のバクザン省国際交流課で活動の後、南部ホーチミン市オープン大学に転任。特に卒業後日系企業で即戦力となる学生の育成のため、実践的な会話・作文の授業や教師への助言、スピーチコンテストなどの活動を支援。

 **浅野 鉄也**
2017年3月～2019年3月
【ベトナム】ホーチミン市オープン大学

定年、やはりこの機に アジアの地で

日本語教育を目的にJICA海外協力隊に応募したわけではないと言ったら、海外での日本語教育に使命感を抱いている方々からはお叱りをうけるかもしれません。とはいえ、実のところ、私が“JICA海外協力隊に”と思ったそもそもの動機は、若いころに抱いていたアジアの国々への思いを、定年を機に実現できる格好の機会だと思ったからです。

ところが、いざ募集説明会に行ってみると、長年の行政支援の経験を生かせる職種は皆無に近い状況でした。やむなく2年間のブランクを挟みましたが、しかし、やはりと思い直し、募集も多く、これから挑戦できそうな職種「日本語教育」への応募にむけ、ゼロからのスタートを切りました。ちょうど日本語教育のあり方が大きく変わる時期にあたっていたこともあり、指導を受けた先生からの「新しい教え方を身につけた考える教師になりなさい」との激励に意を強くし、必要な経験を積んだのち、JICA海外協力隊に応募。こうしてベトナムでの第一歩を踏み出したのです。

日本語のシャワーと 会話のラリー

初任地のライチの郷バクザン省では、日本語通訳の育成や地域情報の発信活動を支援しました。いわば、日本からの投資拡大手段としての日本語教育です。ベトナムは、教師、高齢者への尊敬の念が強い国ですが、それに加えあこがれの地日

本から来た隊員ということもあり、こちらが当惑するほどの心づかいをしていただきました。

一方、9か月後に着任したオープン大学では、言うまでもなく学生への日本語教育そのものが目的。180度の教育スタンスの転換です。そこで出会った学生たちは、もう3年生だということに中高生かと錯覚するくらい素直です。その一方で、彼らの日本語の発話力は、悲しい気持ちにさせられるくらい残念な状態でした。そこで、真っ先に立てた授業方針は、「学生たちがナマの日本語と接する時間を1分1秒でも多く確保する」です。こうして、習い始めたベトナム語も封印(?)し、学生たちに日本語のシャワーを振りまきながら、時間が許す限り会話ラリーや役割練習に専念させる授業をスタートしたのです。



苦しさから楽しさへ、 そして教師のレベルアップ

大学側からのJICA海外協力隊への要請は、日本語学科の総合的なレベルアップ、特に卒業後日系企業で即戦力となる

学生の育成でした。この学校は、1教科1回4時間と授業時間がとても長いのですが、早速拝見した授業は、それに輪をかけたように、短い文をひたすら繰り返させる単調な練習一辺倒でした。学生にとっては、まさに苦行のような4時間です。

そこで次にめざしたのが、ひたすら“覚える”ことを目標にした授業スタイルの見直し、気おくれせずに話ができる“使える日本語”の導入です。最初は会話中心の活動的な授業に、少し戸惑っていた学生たちにも、新鮮で楽しい時間として好意的に受け止めてもらえました。あわせて、そうした指導方法の紹介を兼ね先生方の勉強会を始めたり、国際交流基金の研修会への参加を呼びかけたりしました。

担当する会話・作文・日本文化の授業のほか、使用する教科書へのアドバイスをはじめ、各種日越交流会や学生の日本語クラブ、ベトナム各地で開催されるスピーチコンテスト参加などの活動を支援しました。特に、着任早々指導をまかされた南部10大学のスピーチコンテストでは、初参加で優勝という好結果が得られ、その後のボランティア活動における信頼確保への大きな足がかりになりました。



コロナ禍、今もベトナム

自分一人の力では、教室内の学生だけが相手です。目標とする総合的レベルアップには、やはり先生方皆の意識が変わる必要があります。そうした点からみると、オープン大学では1年3か月ほどの短い活動期間でしたが、変化へのきっかけを作る役割は果たせたように思えます。

JICA海外協力隊としての任期終了後、一旦帰国しましたが、大学からの要請もあり、家族の理解を得て、後任着任までの1年間の約束で常勤講師として改めて赴任。引き続き学生たちと接してきました。そんな中の予期せぬコロナ禍です。外出制限下のオンライン授業もなんとか乗り切り、当初の契約期限を6月末に迎えたのですが、それから半年近くが過ぎた今もなお、帰国がままならない状態です。

とはいえ、この機においてもなお、目の前で日々成長していく学生たちの貴重な時間をともに過ごさせていただいているのですから、むしろ想定外の幸運と考えるべきなのかもしれません。しばらくは、ここホーチミンにあって、時として起こるコロナ休校に振り回されながらの彼らとの生活が続きそうです。(2021年1月時点の情報)

現地の生活

任地での活動のキーワードは健康、まずは食べ物です。その点ベトナムでの主食は、ライスペーパー、フォーと形が変わってもお米がベース、胃腸が反発しません。この3年余食生活で苦労した思いはありません。その匂いに閉口する人も多いようですがエビの塩辛(?)マムトムをつけて食べるブンドウ(米の麺と揚げ豆腐)は、一番の好物です。ついでバインセオ、ベトナムのお好み焼きともいわれますが、あっさりしていて私はこちらの方が好きです。学生たちも一押しです。いずれにせよ、ベトナムの食べ物は、香りがきいてシンプル&テイスティー、しかも驚くほど安いのです。最近日本でも食べることができるお店が増えているとか。ぜひお試しください。



私の年表


大学	文学部で仏文学を学ぶ
大学卒業後	公務員として地方都市で働く
定年	大学院修士課程で総合政策を研究
62歳	日本語教師養成講座に通う
63歳	日本語教育能力検定試験に合格 地域のボランティア教室及び日本語学校で日本語を教える
65歳	JICA海外協力隊に参加
現在	ベトナムの大学で日本語を教える

JICA海外協力隊には、開発途上国での行政支援の募集も多く、定年後の参加を心当てにしていました。しかし、いざその時になってみるとそうした職種は皆無に近い状態。あらためてこれから挑戦できる日本語教育の勉強を始めました。日本語教育能力検定試験に合格後、必要な経験を積み、JICA海外協力隊に参加。現在は、ベトナムの大学で引き続き日本語指導にあたっています。

「楽しい授業を知らない人たち」と 楽しく授業し、楽しく学びたい

ウズベキスタンの首都にある外国語大学で日本語専攻の学部生、大学院生、教員とアクティブラーニングを実践するとともに、ゼミ指導・教員セミナーなどを通して未来の日本語教員養成を目指す。



 阿部 由美子
2018年3月～2020年7月
(ウズベキスタン)ウズベキスタン国立
世界言語大学

青年海外協力隊参加の夢を シニアで叶える

青年海外協力隊について知ったのは1970年代、中学生のころです。海外渡航や留学がまだ珍しかった時代、どこでもいい、海外に出る機会の1つとして、協力隊参加を夢見ました。その後、日本語教員として海外で働くようになり、夢は叶ったかのように思いましたが、協力隊への関心が薄れることはありませんでした。そして親たちの介護を終え、配偶者の退職を機に、協力隊に応募しました。

オアシスの街で 日本語学習から日本研究まで

任国のウズベキスタン共和国は中央アジアに位置し、海に出るために2か国を経由しなければならない二重内陸国です。シルクロード上に栄えた古代都市を有し、派遣先の首都タシケントもオアシスの街です。一歩街を出ればステップ砂漠が広がりますが、近郊の山からの雪解け水という水源に支えられ、大きな街路樹が茂り、各所に噴水が設けられた美しい街です。ソビエト時代の建造物、水路、1991年の独立後に造られたウズベク的な記念碑、大きな市場、イスラム建築などが混在する町並みは散歩に最適でした。

配属先は国立世界言語大学内の通訳理論実践学部日本語講座でした。国内で女子学生の比率が最も高い大学です。派遣当初は一講座12名という少人数制でしたが、若年人口と大学入学希望者の増大に合わせ、毎年、入学定員が倍増し

ています。派遣された年に初めて日本研究の修士課程が設置され、一期生として内部進学の名をいただきました。全員女性です。任国では多くの女子学生が大学在学中に結婚式を挙げ、妊娠出産を経験します。迎えた院生たちも、家庭と学業、ときには補助教員としての役割まで果たしながら、大学院に来ていました。教員もほぼ女性で、家事育児と職業の両立に悩みながら、留学や研修の夢を持つことは学生たちと変わりありませんでした。現実と夢の往還する教育現場でした。

楽しい授業の実践、 そしてSNSを通じた支援へ

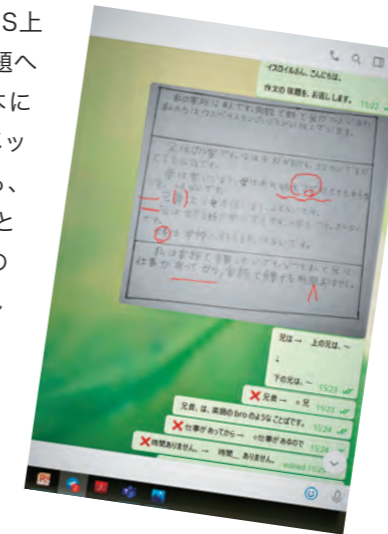
学習態度、また教員に対する姿勢が受け身になりがちなのはアジアの学生の共通項かと思えます。それを打破すべく、ピア活動、グループ活動、プロジェクト活動を多く取り入れ、教員の方ばかり見るのではなく、自分で調べたり、友人同士で楽しく学びあうクラス活動を目指しました。学生、教員からの質問にも、必ず「あなたはどのように考えるのか、どんなふうになりたいのか」と問い返すようにしていました。また、タシケントでは数少ない日本語ネイティブである他の隊員を大学に招き、日本語で専門的な話をしてもらったり、書道などの文化学習のお手伝いをお願いしたりして、交流を図りました。

その場で何かできることを見つけながら、人懐こい学生、教員の方たちとともに楽しく学びあえたこと、大学院生と日本の短編小説の講読ゼミを継続して開き、文学作品の翻訳に関心を持ってもらったこと、教員セミナーを通して授業実践報告を行ったり、日本から研究者を迎えて共に新知識を得たりして、



新たな外国語教育の地平の広がりをウズベキスタンの地で実感できたことは大きな喜びでした。

2020年3月、首都がロックダウンし、日本に一時帰国した後は、学年末までSNSを使った活動を続けました。学生とのQ&A、教材の提示、SNS上での期末試験実施、課題へのフィードバック、日本に留学中の在学学生へのメッセージ送信。SNSでも、様々なことができることを実感しました。その他、配属先で開催されたセミナーへのオンライン参加、留学生試験を受ける卒業生のための面接練習なども行いました。



「教え、学ぶ楽しさ」を 伝え続けたい

現地での活動で肝要なことは、やはり現場での人間関係構築に尽きます。本格的な活動に入るまでには、これにかかる時間が必要です。この点、日本語教員は日本語でイニシアティブが取れるので、かなり有利です。

私の活動のターゲットはまず、教員でした。先生方には、教えることを楽しんでほしい、そして授業を構築する楽しさを伝えたいと思っていました。私自身が楽しそうに授業していると、段々と先生方も心を開き、質問したり、悩みや夢を打ち明けてくれるようになったかと思えます。また、学生たちも未来の教員候補です。学生との交流を楽しむ教員の姿から、何か掴んでくれたら嬉しいな、と思いながら授業していました。

現在は、在宅で前職の同僚たちの日本語教科書編纂を手伝っています。日本語教育、外国語教育の考え方も手法も日進月歩です。どこまでついていけるかはわかりませんが、配属先の方々と絆を大切にしつつ、新たな情報化社会に対応してゆきたいと願っています。

(2021年1月時点の情報)

現地の生活

私たちウズベキスタン派遣の隊員は派遣前訓練でウズベク語をキリル文字表記で学習しました。しかしソ連時代の名残りで、赴任先の首都タシケントにはウズベク語を解さないロシア語母語話者も多く、ロシア語学校もあります。看板もウズベク語とロシア語併記、またウズベク語もキリル文字とラテン文字表記が混在。活動先の日本語講座は、着任2年目からウズベク語母語話者クラスと、ロシア語で教育を受けてきた学生のための「ロシア語で日本語を教える」クラスの二本立てに。指導した大学院生たちはウズベク語母語話者なので、いま、教壇に立って、このロシア語クラスでの教育に苦労しています。現地の人をも悩ませるこの教育と言語の問題には深く考えさせられます。



私の年表

大学・大学院	学部・修士課程で比較文化・アジア地域研究を学ぶ
大学院修了後	日本語教員として主に韓国の大学に勤務 配偶者の海外赴任に伴い、開発途上国数か国に家族と居住
49歳～56歳	日本の大学の留学生センターに勤務 多文化・多国籍の日本語学習者がいるクラスを経験
55歳	日本語教育能力検定試験合格
57歳	JICA海外協力隊に参加
現在	在宅で日本語教科書編纂に協力

30数年間、海外と日本の大学・大学院や専門学校で日本語教育と日本研究指導に携わりました。協力隊参加への夢を捨てきれず、説明会でご指南を受けて日本語教育能力検定試験を受験し、協力隊に参加。現在は前職同僚たちの日本語教科書編纂に協力しつつ、各種相談に応じたり、関心のあるセミナーにオンラインで参加する日々です。

JICA海外協力隊 日本語教育 Q&A

職種「日本語教育」に関すること

Q 職種「日本語教育」では、どのような資格条件が求められますか。

A 要請ごとに求められる資格条件が異なります。多くの要請で「日本語教育に関する資格」を資格条件の1つとして挙げています。「日本語教育に関する資格」とは、一般的に以下のうちいずれかを満たしていることを指します。

- 420時間程度の日本語教師養成講座(通信講座を含む)の修了
- 大学または大学院の日本語教育主専攻・副専攻などの修了
- 日本語教育能力検定試験合格
- 登録日本語教員(2024年度から)

Q 「一般案件」の場合、日本語教師として働いた経験は必要ですか。

A 要請ごとに求められる経験が異なります。要請情報の「資格条件」欄に「実務経験」とある場合、それは「雇用形態(有給・無給)は問わず、日本語教師としての経験」を指しますので、経験が求められます。一方、実務経験の年数を問わない要請、実務経験を求めない要請もありますので、経験が少ない方、ない方でも応募可能です。ただし、即戦力として日本語の授業を行うことが求められる場合がほとんどですので、クラス形式での授業を経験しておくことをお勧めします。

Q 「シニア案件」の場合、日本語教師として働いた経験はどのくらい必要ですか。

A 「シニア案件」の場合、実務経験15年程度以上が求められます。「シニア案件」とは、シニア年齢層対象の案件という意味ではなく、一定の経験・技能等が必要な案件という意味です。コースや学科の立ち上げ、任国の教育制度に関わる活動、大学院の学生への研究指導等を行うことが多く、十分な専門技術や知識、経験が求められます。

Q どのような教育機関で、どのような活動を行いますか。

A 日本語教育隊員は、初等・中等教育機関(中学校・高校)、高等教育機関(大学)、専門学校・職業訓練校、日系日本語学校などに派遣されます。期待される活動内容は

派遣先ごとに異なりますが、一般案件では、学習者に対する日本語の授業、日本文化紹介や日本語関連のイベントの企画や実施、現地教師の日本語運用能力や指導技術の向上のための協力が中心です。日系日本語学校では、日本語教育実施への協力に加え、情操教育や日系社会が行う行事への協力を期待されることも多いです。シニア案件では、教材の作成・見直し、カリキュラム・シラバスの見直しなど、基盤整備に関する活動を行うこともあります。

Q 派遣先では一人で日本語を教えるのですか。

A 同僚となる現地の日本語教師がいる場合もありますし、一人で教える場合もあります。現地の日本語教師がいる場合は、チームティーチングを行ったり、科目や学年ごとに授業を分担したりします。現地の日本語教師がいない場合は、配属先の他の科目の教師や学科長・校長などと相談しながら、隊員一人で日本語のカリキュラム・シラバス作成、授業、評価まで行うこともあります。

Q 応募時にどの程度の語学力が求められますか。また、活動においては、どの程度の語学力が求められますか。

A JICA海外協力隊の応募に際し、必要となる語学力は、活動上必要となる語学力であり、希望される要請によって異なります。詳細については、以下のホームページを参照してください。

(長期派遣 語学の審査について)
<https://www.jica.go.jp/volunteer/application/long/language/index.html>
(短期派遣 語学の審査について)
<https://www.jica.go.jp/volunteer/application/short/language/index.html>

活動上使用する言語は、長期派遣の場合、派遣前訓練でしっかりと習得する機会があります。日本語教育隊員の場合、日本語の授業や現地の日本語教師とのコミュニケーションにおいては、ネイティブスピーカーとして日本語を使うことを期待される場合が多いのですが、派遣先の状況、学習者のレベルや目的によっては、現地の言葉を使って教えることもあります。

Q JICA海外協力隊として日本語を教えるためには、どのような力が必要ですか。

A 配属先ではたった一人の日本人教師であることが多く、また、学習者や現地教師の状況、設備・教材などの教育環境も様々です。活動は日本語を教えるだけではなく、現地教師の指導技術向上のための協力、教材やカリキュラムの改善など多岐にわたることもあります。よってその環境の中で、現地教師や配属先の関係者と協働しながら、学習者のニーズを踏まえた日本語教育を行う柔軟性や行動力が必要です。そして、それを可能にするためのコミュニケーション力、現地言葉を積極的に学ぶ姿勢も大切です。

Q 帰国後はどのような進路に進んでいますか。

A 国内では、日本語学校や大学等で日本語教育に携わっている人、地域における日本語教育に貢献している人、大学院に進学する人などがいます。海外では、個人契約の他、国際交流基金の派遣プログラムや民間プログラムを通じて、日本語教育に携わっている人がいます。日本語教育関係以外の進路に進む人もおり、学校教員などの教育分野の仕事、国際協力分野の仕事、民間企業での仕事など、さまざまです。

JICA海外協力隊全般に関すること

■各募集に関する詳しい情報については、以下のホームページをご覧ください。「募集要項」や「応募方法」は、募集期によって、一般案件(長期派遣・短期派遣)かシニア案件(長期派遣・短期派遣)によって異なりますので、ご注意ください。(募集情報) <https://www.jica.go.jp/volunteer/application/>

■職種「日本語教育」に限定しない、よくあるご質問への回答は、以下のホームページにまとめていますので、ご覧ください。(JICAボランティア事業について/応募について/選考について/合格から派遣まで/派遣中の待遇について/帰国後の進路について/現職参加について/現職教員特別参加制度について/日系社会へ派遣するJICA海外協力隊について/短期派遣について/その他) <https://www.jica.go.jp/volunteer/faq/>

技術顧問からのメッセージ



坪山 由美子
技術顧問
(日本語教育)

1965年に最初の青年海外協力隊が派遣されて以来、3,000人以上が海外の日本語教育現場に派遣されました。最初のころは、派遣先で同僚の日本語教師もいない中、日本語コースの立ち上げをした人も少なくありませんでしたが、今では各派遣先に現地の日本語教師がいるところがほとんどで、その先生方に協力して活動するようになってきました。派遣開始から

現在に至る時間の中で、日本語教育隊員が活動する国や機関の状況は変化していますが、日本語教育は途切れることなく、現在のJICA海外協力隊の職種の1つとして続いています。

これまで派遣された一人一人が教えた学習者の数を合わせると、どれだけの人数になるのか想像もできませんが、もしもその人たちの中に今では「ありがとう」しか覚えていない人

たちがいるとしても、日本人の先生に教えてもらったことの記憶は残っていると思います。それはなぜかという、その日本人が2年間、その国の人が営む社会で生活し、周りにいる人たちと話し、笑い、喜び、試行錯誤し、行動したからです。JICA海外協力隊として海外で日本語を教えることの魅力はそういうところにあるのではないかと思います。

そして、日本から遠く離れ、日本語を学ぶ実利性からは縁遠いと思われる国々で、日本語を勉強している人がいること、日本語を学ぶ機会を提供している機関があるということをもふまえて、そこで日本語を学び、教える意義は何かを考えてみる機会となります。それは、日本で教えているだけでは、知りえないことを知る機会でもあります。

JICA海外協力隊に来てほしいという要請は世界のいろいろな国から来ています。海外で教えたいという心意気のある人、教えることを楽しめる人、海外の文化や生活を楽しめる人、そして、日本語教師として成長したいと考えている人、JICA海外協力隊に参加して、日本語を教えてみませんか。

活躍するJICA海外協力隊経験者

JICA海外協力隊経験者は日本語教育人材として、多文化共生社会の担い手として、国際協力人材として、様々な分野で活躍しています。(2021年1月時点の情報)



勝間田 恵美

配属先: 国立コスタリカ大学文学部現代言語学科
(コスタリカ・2003年～2005年)
現在: 千駄ヶ谷日本語学校日本語教育部 教務主任

当時の活動

首都にある大学で、第二外国語の1つとしての日本語の授業と、現地の日本語教師への日本語指導やサポートをしていました。日本語クラスは3レベルあり、カリキュラムの設定から教材の作成、授業、成績評価まで担当しました。地域での日本文化紹介や、他の教師と協働でのカリキュラムや教材の作成、整備も行いました。現地では、日本語が学べる機関は限られており、日本語と共に、地理的に遠い東アジアの文化や考え方を学びたいというニーズも多く、アニメに興味がある人はもちろん、建築や工学などを専攻する学生も履修していました。

現在の仕事

現在、私は東京にある千駄ヶ谷日本語学校で、主に日本での進学を目指す留学生を対象とした準備教育課程で日本語を教えています。初級から上級レベルの学生への日本語指導、進路指導とともに、教務主任としてコース全体の運営・管理を担っており、カリキュラムの整備やクラス編成、教師の調整や育成などに携わっています。また、日本語教師養成講座において、指導法の授業も担当しています。今の私の仕事には、隊員時代の経験がとても役立っています。隊員としての活動中、「外国人」の立場で、周囲の大学スタッフや他科目の先生方、地域の人と交流、交渉をすることが不可欠でした。今は、様々な国から来た学生を受け入れ、一緒に働くスタッフにも様々な国籍の人がいます。また、日本人同士でも、異なるバックグラウンドを持った教師と協働して仕事を進めるために、それぞれの価値観を理解し、受け入れるための基礎は、隊員時代に培われたものだと思います。日々、様々な国から来た学生から刺激を受け、変化に富んだ毎日を過ごしています。



岩田 和美

配属先: 王立法律経済大学
(カンボジア・2008年～2010年)
現在: 公益財団法人しまね国際センター
地域日本語教育コーディネーター

当時の活動

配属先の大学に設置された日本語コースで、カンボジア人の日本語教師であるカウンターパートとともに活動しました。日々の授業は、カウンターパートが行うことが多かったのですが、授業準備の段階で一緒に教案や活動を考えたり、授業後のフィードバックを行ったりということが日常の活動でした。また、試験や季節のイベントはもちろん、コース運営の方針などもカウンターパートと決めていたので、ミーティングも頻繁に行っていました。

現在の仕事

現在は、(公財)しまね国際センター(SIC)で地域日本語教育コーディネーターとして働いており、主に、「SIC訪問型日本語コース(地域訪問型・企業訪問型)」に関する業務を行っています。このうち、地域訪問型は、仕事や家庭の事情、交通の問題などで地域の日本語教室に通うことができない外国人住民の方の自宅や近くの公共施設にボランティアの方を派遣し、一対一で日本語を学習してもらおうというものです。コースの広報や実際の学習のサポートをはじめ、日本語ボランティアの養成講座の実施や、使用するオリジナルテキストの作成、1組ずつのマッチング作業など、実施に係る業務はいろいろとありますが、「親切なボランティアさんと学習できてよかった」「外国人住民の方と接することができて、こちらが元気をもらった」という外国人住民、日本語ボランティアの双方からの感想をいただけることが、この仕事のやりがいにつながっています。



瀬戸 彩子

配属先: ドドマ大学人文学部外国語学科
(タンザニア・2015年～2017年)
現在: 神田外語大学留学生別科 専任講師

当時の活動

東アフリカ・タンザニアの大学に派遣され、日本語専攻の学生や日本語を選択履修する学生を対象としたクラスを担当しました。文法や語彙、会話の練習だけでなく、日本文化の紹介や体験の機会も設けるようにしました。当時苦労したのは、将来日本語を使うチャンスのほとんどない学生をいかに動機づけるか、ということでした。彼らにとって遠く、身近でない言語に親しんでもらうために、様々な工夫をしました。学んだ表現を使って積極的に話そうとする学生が出てきたときは、うれしく思ったことを覚えています。

現在の仕事

帰国してから、現在の所属先で海外協定大学からの短期交換留学生に日本語を教えることになりました。文法や漢字、読解、作文、インターアクションなどの科目を担当しています。本学では複数レベルのクラスを開講しているため、来日後のクラス分けテストやオリエンテーションなどの業務も行っています。協力隊での経験は、多様な地域から来日する留学生たちがそれぞれの国で、どのような環境で日本語を勉強してきたのかなどのレディネスを把握し、授業を設計する際に役に立っています。また、タンザニアという、日本語を使うチャンスのほとんどない環境で日本語教育に携わったことで、言語教育の意義を考えるようになり、将来日本語を使う場面がなくても、人格形成や視野を広げることに寄与する教育内容を考えなければと思うようになり、現在の自身の実践に影響を与えています。さらに、タンザニアの大学生の日本語学習動機について、帰国後に調査・発表する機会もありました。協力隊参加が現在の授業実践と研究活動につながっており、キャリアアップを実感しています。



東山 正希

配属先: ドミニカ日系人協会
(ドミニカ共和国・2013年～2015年)
現在: 山梨県企業局早川水系発電管理事務所 主事

当時の活動

私はドミニカ日系人協会が運営する日本語学校において活動を行いました。活動内容は、日系人(6～18歳)への日本語・日本文化に係る指導のほか、様々でした。印象に残った活動は、仲間と共に取り組んだ「移住学習」です。日系人としてのアイデンティティを形成する際、当事者が自ら感じ、考えることが大切だと思い、学習者に対し、「自分は何者か」「なぜ、日本語を学ぶのか」などを問い、考える機会を設けました。

現在の仕事

山梨県庁に勤務し、現所属で2所属目となります。初めに、観光部国際観光交流課に配属され、姉妹都市等との国際交流や国際協力に係る事業を担当しました。現在は、県営水力発電所の維持・管理を担う企業局早川水系発電管理事務所、用地事務や庶務・経理を担当しています。国際協力には直接関係ありませんが、SDGsやクリーンエネルギーの重要性についてまとめ、所内への啓発を図るなど、日々、自分にできることを考え、取り組んでいます。また、地方公務員となってからは、公私問わず「地域との繋がり」を大切にしています。そのため、私生活においても、町内にある蕎麦屋の店主と町内外の方々を繋ぐイベントを企画したり、観光協会が主催するイベントで弾き語りを披露したりして地域と繋がっています。JICA海外協力隊と地方公務員は性質が似ています。そういった意味でも、ボランティア活動で培った経験を、今後も山梨県に還元していきたいです。



小松原 奈保

配属先: ホンバン大学日本学科
(ベトナム・2004年～2006年)
現在: ラオス国立大学文学部日本語学科
国際交流基金日本語上級専門家

当時の活動

町にはまだ信号機が1つしかなく、今よりもゆったりとした時間が流れていたベトナム、ホーチミン市。この町のホンバン大学に赴任したのは、今から16年も前のことになります。私は主に1、2年生の授業を担当しました。学生も先生もまだ初心者で失敗もたくさんしましたが、クラスには笑いが絶えず「みんなでがんばろう!」という雰囲気包まれていたのを覚えています。わかる学生がわからない学生を助ける姿に、私の方が勉強させられた2年間でした。

現在の仕事

自分の未熟さに気づいた私は、帰国後に帰国隊員教育訓練手当(注1)を利用して大学院へ進学しました。そして、学位取得後に国際交流基金の日本語専門家として再びホーチミン市へ戻り、中等教育における日本語教育に従事しました。日本語を教えている中学や高校の教師を対象に教師研修をしたり、実際に学校へ行って一緒に日本語の授業を担当したりしながら、ベトナム人教師の日本語能力や教授能力の向上に努めました。高校教師の中には協力隊時代に大学生だった教え子があり、一緒に教壇に立つのはとても楽しい時間でした。それから、日本語専門家としてスリランカやラオスの大学でカリキュラム・シラバスの整備や講義をする傍ら、その国の中等教育の教材作成や教員養成に携わっています。先日、ベトナムの高校で教えた生徒が母校で教師となって教えている姿を目にしました。日本語教育のバトンが次々と若い世代に渡されていると知り、大きな充実感に満たされました。

注1: 帰国隊員の帰国後の進路開拓に役立つ技術・技能の修得または免許・資格の取得につながる教育訓練に対して、JICAが支援する制度



藤川 純子

配属先: フロリダパウリスタ日伯文化協会
(ブラジル・2000年～2002年)
現在: 四日市市立笹川小学校教諭

当時の活動

町に住む日系3世・4世には継承語としての日本語はほとんど残っていなかったため、6～65歳の40数名の生徒をいくつかのクラスに分けて、週2時間ずつ指導しました。子どもクラスでは、日本にプラスのイメージを持ち、日本語を楽しんでもらうことが大切だと考え、歌、ダンス、ゲームなどを取り入れました。地域の日本語スピーチコンテストで9名も入賞できたことや、七夕などの伝統行事を復活できたこと、地元の中学校の夜間部に聴講生として通ったことなど、素晴らしい体験ができました。

現在の仕事

帰国後1年間は、三重県国際交流財団の外国人生活相談員をし、小学校の正規教諭となってからは、ブラジルにルーツのある子どもが全児童の30%近くを占める3つの小学校に勤めました。通訳を介さずに直接保護者対応ができることや自らの体験を授業で語れることは協力隊経験の成果です。ブラジルから持ち帰った物や写真を入れた「ブラジルボックス」をゴロゴロと引っ張って教室に入っていくと、子どもたちは歓声をあげます。小さい子にはナマケモノのぬいぐるみを抱っこさせます。アマゾン川の巨大魚ピラルクの鱗を触らせたり、「ミニ先生」としてブラジル人児童を前に出してポルトガル語講座をします。少し大きい子どもたちは多文化共生について主体的に考える学習をします。違う文化、違う言葉、違う価値観や宗教観を持つ人たちとどうやって共に生きるかを対話的に考えていく経験は、すべての子どもたちにとって必要です。協力隊経験を持つ教員として、未来の日本を創っていく一員であり続けようと思います。



鈴木 歩未

配属先: ババウ高校(トンガ・2017年～2019年)
船員養成校(キリバス・2012年～2014年)
現在: 外国人技能実習生の監理団体

当時の活動

2012年から2014年までキリバス共和国の船員養成校へ、2017年から2019年までトンガ王国のババウ島にあるババウ高校に派遣されました。キリバスでは日本の遠洋漁船で働く船員を目指す訓練生の日本語教育や日本文化や伝統、マナーやルールなどの指導、トンガでは選択科目の「日本語」を選択した13歳から18歳までの生徒に日本語教育を行いました。学校行事で生徒たちが日本文化の紹介やダンス、歌を全校生徒や生徒の家族に対して披露する機会を作りました。

現在の仕事

帰国後、自分の今までのスキルを活かせる場所か、未経験でも自分のやりたい仕事に挑戦するかを悩んでいた時に、JICA進路相談カウンセラー(注2)と面談しました。直接話をしたり、応募書類などでのアピールの仕方の指導を受ける中で、現在の仕事に挑戦することを決めました。私は外国人技能実習生の監理団体で、実習生の受け入れを検討している企業への説明、実習生候補者との面接の同行(海外出張)、日本国内の実習生の巡回・指導や受入企業との打ち合わせやヒアリング、そして希望があれば日本語教育も行っています。実習生と話す時などは通訳を介すことが多いのですが、日本語教師としての経験から、通訳なしで実習生が分かりやすい日本語を使用しながら会話ができて、相談事に早く対応することにより、実習生が安心して日本で実習できるようサポートを行っています。実習生が笑顔で母国に帰国できるよう、時には寄り添い、時には指導しながら日々の業務に努めています。

注2: 帰国隊員の進路について相談にのるとともに、就職や進学をはじめ各種情報の提供などを通じて、進路開拓を支援するカウンセラー。



大石 紗己

配属先: 経営高等学院大学
(セネガル・2014年～2016年)
現在: あしなが育英会セネガル事務所
プログラムマネージャー兼日本語教師

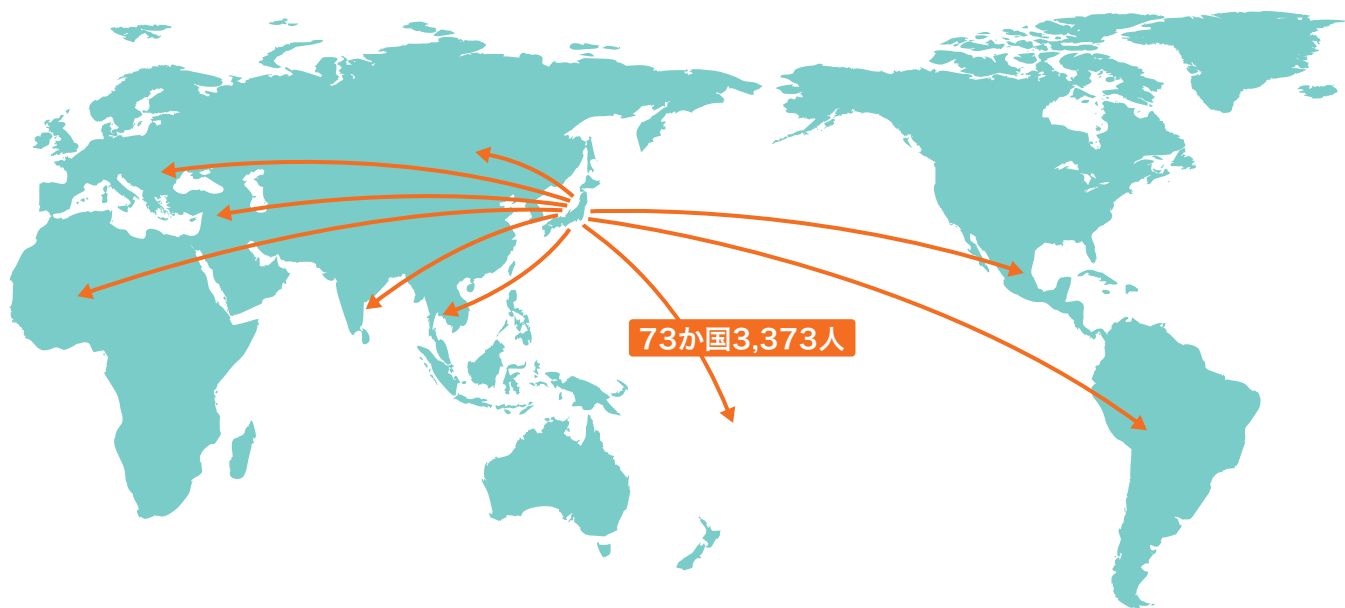
当時の活動

私は、西アフリカにあるセネガル共和国の首都ダカールのビジネス学校に派遣されました。主な活動は、安定した日本語コースの提案、初級の日本語の授業、日本クラブや日本祭りなどの行事の企画と運営の3つでした。日本語のクラスでは日本や日本語に親しんでもらうことを目的とし、少しでも多くのセネガルの学生に日本を知ってもらおう努めました。その他、学生を主体として日本クラブを作り、年に1度、日本祭りを行いました。

現在の仕事

協力隊の任期が終了した後、ダカールに戻り、「あしなが育英会セネガル事務所」に勤務しています。本部を日本に置くあしなが育英会は、遣児学生への教育支援を行なっています。アフリカでも同様に遣児学生を対象とし、特に高校卒業資格を持つ学生に対してリーダーシップ育成と留学支援のプログラムを提供しています。私は主に日本へ留学する学生への日本語教育を行い、留学生活への準備を支援しています。日本へ行く学生たちはセネガル人だけでなく、アフリカのフランス語圏の国から採用されており、毎日が発見と学びに包まれています。職場も多国籍なスタッフでダイバーシティを受け入れた環境となっています。協力隊の時を得た積極的に行動する力と、現地の人たちの目線で気持ちや文化を考慮するというスキルは大いに役立っています。ポテンシャルとやる気を持ち合わせた学生たちが、自分たちの大陸や国の未来を考え、貢献するための一歩を踏み出すお手伝いができることに私自身、大きな使命を感じてやり甲斐を持って業務に取り組んでいます。

JICA海外協力隊 日本語教育 派遣実績



1965年の派遣開始から2023年12月までの派遣人数累計(日本語教育)

アフリカ		中東地域		東南アジア		中南米	
スーダン	6	ヨルダン	28	インドネシア	90	コスタリカ	70
ボツワナ	3	シリア	32	マレーシア	159	キューバ	1
ガーナ	1	エジプト	22	フィリピン	42	ドミニカ共和国	82
ケニア	15	モロッコ	37	タイ	172	エルサルバドル	20
ウガンダ	3	チュニジア	28	カンボジア	40	グアテマラ	17
タンザニア	8			ラオス	21	ホンジュラス	15
ザンビア	2	中央アジア		東ティモール	1	ジャマイカ	23
ブルキナファソ	2	キルギス	23	ベトナム	115	メキシコ	74
コートジボワール	4	タジキスタン	10	東アジア		ニカラグア	16
マダガスカル	10	ウズベキスタン	44	中華人民共和国	420	パナマ	8
モザンビーク	1	ジョージア	2	モンゴル	74	アルゼンチン	126
セネガル	14	南アジア		大洋州		ボリビア	65
		ブータン	6	フィジー	19	ブラジル	595
欧州		バングラデシュ	6	キリバス	4	チリ	18
トルコ	1	インド	79	マーシャル	29	コロンビア	28
ブルガリア	59	モルディブ	18	ミクロネシア	50	エクアドル	13
ルーマニア	18	ネパール	5	バプアニューギニア	26	パラグアイ	134
セルビア	6	スリランカ	63	ソロモン	1	ペルー	22
ハンガリー	62			トンガ	88	ウルグアイ	12
ポーランド	35			バヌアツ	12	北米	
				サモア	9	カナダ	5
				パラオ	4		



独立行政法人 国際協力機構(JICA)
青年海外協力隊事務局

JICA海外協力隊ホームページ <https://www.jica.go.jp/volunteer/index.html>

応募に関するお問い合わせ JICA海外協力隊募集事務局
contact@jocv.info

本パンフレットに関するお問い合わせ jicajv-japanese@jica.go.jp